

市史講座第6回ミニレポート

9月21日(土)第6回の講座が開かれました。

第1部：「“プレ出雲国”成立の背景～古墳時代中後期の松江～」(講師:島根県古代文化センター主任研究員 松尾充晶 先生)



7世紀後半～8世紀初頭に整えられた出雲国の前身となる地域結合体を“プレ出雲国”とし、その成立の背景となった古墳時代中・後期の松江について、お話をして頂きました。

まず、6世紀中頃～末までは、出雲の東部には山代二子塚古墳、西部には大念寺古墳というように、東西それぞれに拮抗する大首長が存在したが、7世紀初頭になると東西差が解消する装飾付大刀分布のあり方から、西部首長が東部首長に従属したのではないかと推測されています。それは、王権中枢における物部宗本家の滅亡といったことが、地域の首長権構造に反映しているためではないかと話されました。

この東部首長、のちに出雲国造となる出雲臣の支配領域を“プレ出雲国”とし、それは7世紀初頭には成立した、とされました。

また、6世紀後葉～7世紀初頭には、前田遺跡やキコロジ遺跡などで、首長が執りもつ祭祀が認められる点にも注目し、これらの遺跡は立地(水辺・交通路付近)や祭具構成(実用品の刀や琴が出土)に共通性があることから、出雲国造に統属される首長間では、祭祀体系が共有されていたのではないかと推測されています。さらに、5世紀後葉～6世紀前葉の石田遺跡では、谷奥湧水地において琴が出土しており、こうした首長層による祭祀管理の原型ではないかと推測されました。

第2部：「水の都の恩恵と脅威～松江と江戸～」(講師：人間文化研究機構国文学研究資料館教授 渡辺浩一 先生)

「水の都」として有名な松江ですが、松江城下に住む人達は、宍道湖で獲れる魚介類や水辺の景色など様々な「水の恩恵」を受けてきました。一方で松江城下は度々の洪水にも脅かされてきました。渡辺先生は松江のこうした特長を踏まえて、江戸時代の城下町についてお話をされました。

「松江城下町絵図」を見ると、城郭と北部を除く都市全域が低湿地であった事や、道路と水路の2種類の交通路が使われていた事がよく分かります。また、松江の御用商人新屋(あたらしや)屋敷には「灘座敷(なだざしき)」があり、藩主や一族の遊興の場であったそうです。明治期に描かれた「松江四季眺望図」の末次町付近を拡大してみると、大橋川に面して「灘座敷」が描かれています(『松江市史』の箱デザインに使用しています)。

一方、洪水も頻繁に起こっており、特に延宝2年(1764)には大橋が半分落ち、天神橋が全壊する被害があったようです。しかしながら、多数の死者が発生した江戸と違い、松江では死者がなかったそうです。その理由として地形条件の差と、住民の流動性が高い江戸と比べ災害体験が継承されやすく、相互扶助力が高い、という特徴があると話されました。

江戸時代からもたらされてきた「水の恩恵と驚異」は、松江住民にとって未来へ引き継ぐ課題でもあるでしょう。

